
宝くじ七不思議奇譚（５～７）

山之口 博道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝くじ七不思議奇譚（5〜7）

【Nコード】

N8149F

【作者名】

山之口 博道

【あらすじ】

宝くじにまつわる都市伝説です。

その5〜その7

その5

大好きなお母さんが亡くなって49日もすぎた頃、ある日何と娘さんの夢枕にお母さんが立ってこういいました。

「娘や、私は宝くじが好きで20年買い続けてきたが1度も当たらなかつたのがただ一つ心残りだよ。」

はっと目覚めた娘さんは次の日、早速宝くじ売り場に行き10枚かつて母の霊前に供えたそうです。

そして当選発表日、

何と、1000万円当選でした。

母の念が通じたのでしょうか？

先祖代々の古いお墓を新しくしたそうです。

その6

ある男、夢で、必死に数字を書いている夢を見ました。

メモ帳に、5 7、17 23 31 39等と書いているのです。

この人それまで宝くじなんて買ったこともありませんでした。

でも、もしか、これって、ロト6の数字なのではないか当たり、早速夢に見た数字を買ってみました。

結果は、1等当選2億円でした。

その7

宝くじが好きで、いつも1枚しか買わないおばあちゃんがいたそうです。

同じ売り場で、いつも1枚です。

所詮当たりません。

でもいつも買うのです。

売り場の人が言いました、

「中々当たらずに御免ね、おばあちゃん。」

「いいんだよ。あたるかなあというわくわくがたまらなくてね」
そのおばあちゃんがとうとう当たったのです。

でも、おばあちゃんが亡くなって、遺品の中からでてきた1枚のくじけんが1等に当たっていたのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149f/>

宝くじ七不思議奇譚（5～7）

2010年10月15日20時04分発行